

新約聖書に収納された「ピレモンへの手紙」にみられる裏返し構造

Contrast structure in “Paul's Letter to Philemon”

大喜多 紀明¹

¹滋賀民俗学会

Noriaki Ohgita¹

¹Folklore Society of Shiga

キーワード：裏返し構造，ピレモンへの手紙，聖書

Key words : Contrast structure, Paul's Letter to Philemon, Bible

抄録

裏返し構造とは、従来、異郷訪問譚の形式の物語にみいだされてきた構造であるのだが、異郷訪問譚ではない形式の物語にもこの構造がみとめられるか否かについては検証されてこなかった。そこで筆者は、はたして異郷訪問譚ではない物語においても裏返し構造がみとめられるかの調査をおこなったところ、いくつかのアイヌ民族を話者（あるいは筆者）とするテキスト、および、いくつかの聖書テキストにおいては裏返し構造がみとめられることが確認された。本稿の目的は、聖書テキストに含まれる「ピレモンへの手紙」においても裏返し構造がみいだされることを示すところにある。

1. はじめに

従来、裏返し構造は、異郷訪問譚の形式による物語にみいだされる構造上の「共通の約束」⁽¹⁾であるとされてきた。その一方、この構造が異郷訪問譚以外の形式の物語にもみいだされるか否かについては検証されてこなかった。そこで、筆者は、異郷訪問譚とはいえない形式の物語にも裏返し構造がみいだされる事例があるかの確認をおこなったところ、いくつかのアイヌ民族を話者（あるいは筆者）とするテキスト⁽²⁾、および、いくつかの聖書テキスト⁽³⁾⁽⁴⁾では、異郷訪問譚とはいえないにもかかわらず裏返し構造がみいだされる事例があることがわかった。

上述の、アイヌ民族によるテキストや聖書テキストにおいて、異郷訪問譚とはいえないにもかかわらず裏返し構造が見いだせる事例が存在する理由に関しては、そもそもアイヌ民族のテキストや聖書テキストでは交差対句による構造が頻繁に出現することから、「交差対句の使用を好むアイヌ民族の心性が、異郷訪問譚以外の形式でも裏返し構造を発現させる一因である」⁽⁵⁾という仮説⁽⁶⁾が示された。本稿は、かかる対称性仮説の蓋然性について、聖書テキストに裏返し構造がみいだされるか

を確認するための一連の調査の一つとして、新約聖書⁽⁷⁾に収納された「ピレモンへの手紙」⁽⁸⁾をテキストとしての構造分析を裏返し構造をあてはめる手法に基づいておこなうこととする。

2. 本稿の位置づけ

聖書⁽⁹⁾は旧約聖書と新約聖書から構成されており、本稿で扱うテキストである「ピレモンへの手紙」は、新約聖書に収納されている。旧約聖書は、合計39の「巻」により構成されており、新約聖書は、合計27の「巻」により構成されている。そのうち、裏返し構造をあてはめる手法によって構造分析がおこなわれた聖書テキストは、旧約聖書においては、冒頭の「巻」に相当する「創世記」における巻頭の5つの物語⁽¹⁰⁾であり、新約聖書においては、「マタイによる福音書」の巻頭の5つの物語⁽¹¹⁾、「ルカによる福音書」⁽¹²⁾⁽¹³⁾、「ヤコブの手紙」⁽¹⁴⁾である。また、上述のテキストでは、裏返し構造により構成されている事例が確認された。しかし一方では、検証された「巻」は、旧約聖書においては39の「巻」のうちの1つの「巻」の一部分にしか過ぎず、かつ、新約聖書においては27の「巻」のうちの2つの「巻」および1つの「巻」

の一部分に過ぎない。つまり、検証された「巻」が占める分量は、聖書全体の分量に対してわずかなものであるといえる。したがって、かかる先行研究を以て聖書全般における特性を断言することはできず、他の「巻」についても引き続き検証をおこなう必要があるといえる。本稿は、上述の先行研究では検証されていない「ピレモンへの手紙」について分析をおこなうものである。

3. 裏返し構造

一般的に、異郷訪問譚とは、主人公が異郷を訪問する形式をもつ物語のことを言う⁽¹⁵⁾。大林論文は、一般的な異郷訪問譚の事例として「イザナキの黄泉国訪問譚」・「神功征韓譚」・「浦島子」・「甲賀三郎」をとりあげ、これらが裏返し構造により構成されていることを示した。そのうえで、この構造が異郷訪問譚における構造上の「共通の約束」であるという推論を述べた⁽¹⁶⁾。かかる大林の推論を受けた依田論文⁽¹⁷⁾は、韓国のいくつかの異郷訪問譚にも裏返し構造がみいだされることから、大林の推論を支持する立場をとった。

そもそも裏返し構造とは、以下のAとBの双方の特徴をもつ構造のことである⁽¹⁸⁾。

A: 物語の「前半」部分に配置された要素に対して、物語の「後半」に相当する要素が、「前半」の「否定」・「対立」もしくは「対照」としての関連性を持って出現する⁽¹⁹⁾。

B: 物語の「後半」に配置された要素は、「前半」の対応する要素の配列順序とは逆の順番で出現する⁽²⁰⁾。

かかる裏返し構造の定義に基づき、本稿では、特徴Aと特徴Bの両方の特徴をもつ構造を裏返し構造と呼ぶ。

4. テキスト

本稿のテキストは「ピレモンへの手紙」である。なお、聖書は多くの言語に翻訳されている⁽²¹⁾。日本語に翻訳された代表的なものには、例えば、「口語訳」版⁽⁹⁾・「新共同訳」版⁽²²⁾・「新改訳」版⁽²³⁾などがあるのだが、本稿では、「口語訳」版の聖書に収納された「ピレモンへの手紙」をテキストとする。

「ピレモンへの手紙」は、パウロらからピレモ

ンらに宛てて書かれた書簡形式の文書である。また、主人公が異郷へと訪問する形式の物語ではないので、本テキストは通念上の異郷訪問譚とはいえない。

なお、テキストの分量はそれほど大きくないため、本稿では全文を引用する。なお、テキスト中に付された数字・記号は筆者によるものである。

[A]キリスト・イエスの囚人パウロと兄弟テモテから、わたしたちの愛する同労者ピレモン、姉妹アピヤ、わたしたちの戦友アルキポ、ならびに、あなたの家にある教会へ。

わたしたちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安とが、あなたがたにあるように。[A] [B]わたしは、祈の時にあなたをおぼえて、いつもわたしの神に感謝している。それは、主イエスに対し、また、すべての聖徒に対するあなたの愛と信仰とについて、聞いているからである。どうか、あなたの信仰の交わりが強められて、わたしたちの間でキリストのためになされているすべての良いことが、知られて来るようになってほしい。[B] [C]兄弟よ。わたしは、あなたの愛によって多くの喜びと慰めとを与えられた。聖徒たちの心が、あなたによって力づけられたからである。[C]

[D]こういうわけで、わたしは、キリストにあってあなたのなすべき事を、きわめて率直に指示してもよいと思うが、むしろ、愛のゆえにお願いする。すでに老年になり、今またキリスト・イエスの囚人となっているこのパウロが、捕われの身で産んだわたしの子供オネシモについて、あなたにお願いする。彼は以前は、あなたにとって無益な者であったが、今は、あなたにも、わたしにも、有益な者になった。彼をあなたのもとに送りかえす。[D] [E]彼はわたしの心である。[E] [F]わたしは彼を身近に引きとめておいて、わたしが福音のために捕われている間、あなたに代って仕えてもらいたかったのである。しかし、わたしは、あなたの承諾なしには何もしたくない。あなたが強制されて良い行いをするのではなく、自発的にすることを願っている。[F] [G]彼がしばらくの間あなたから離れていたのは、あなたが彼をいつまでも留めておくためであったかも知れない。しかも、もはや奴隷としてではなく、奴隷以上のもの、愛する兄弟

としてである。[G][H]とりわけ、わたしにとってそうであるが、ましてあなたにとっては、肉においても、主にあっても、それ以上であろう。[H][I]そこで、もしわたしをあなたの信仰の友とってくれるなら、わたし同様に彼を受け入れてほしい。もし、彼があなたに何か不都合なことをしたか、あるいは、何か負債があれば、それをわたしの借りにしておいてほしい。このパウロが手ずからしるす、わたしがそれを返済する。この際、あなたが、あなた自身をわたしに負っていることについては、何も言うまい。[I][J]兄弟よ。わたしはあなたから、主にあつて何か益を得たいものである。わたしの心を、主にあつて力づけてもらいたい。

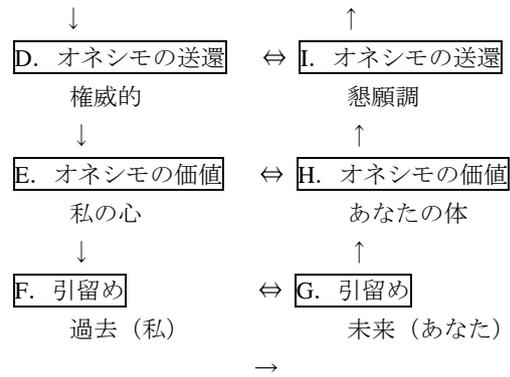
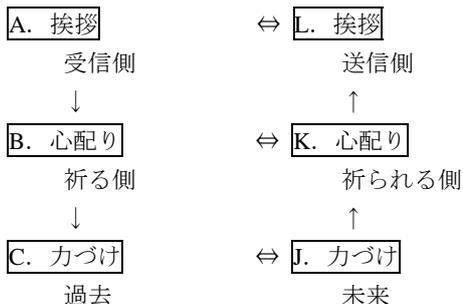
わたしはあなたの従順を堅く信じて、この手紙を書く。あなたは、確かにわたしが言う以上のことをしてくれるだろう。[J][K]ついでにお願いするが、わたしのために宿を用意しておいてほしい。あなたがたの祈りによって、あなたがたの所に行かせてもらえるように望んでいるのだから。[K]

[L]キリスト・イエスにあつて、わたしと共に捕われの身になっているエパfrasから、あなたによろしく。わたしの同労者たち、マルコ、アリストアルコ、デマス、ルカからも、よろしく。

主イエス・キリストの恵みが、あなたがたの霊と共にあるように。[L]

5. テキストの構造

本節では、4節で示したテキストに付された数字・記号に基づき、テキストを、[A]～[A]⁽²⁴⁾・[B]～[B]⁽²⁵⁾・[C]～[C]⁽²⁶⁾・[D]～[D]⁽²⁷⁾・[E]～[E]⁽²⁸⁾・[F]～[F]⁽²⁹⁾・[G]～[G]⁽³⁰⁾・[H]～[H]⁽³¹⁾・[I]～[I]⁽³²⁾・[J]～[J]⁽³³⁾・[K]～[K]⁽³⁴⁾・[L]～[L]⁽³⁵⁾の合計12個の断章とみなすこととする。そのうえで、かかる断章に基づいて作成した図式を以下に示す。



この図式に基づけば、AとL、BとK、CとJ、DとI、EとH、FとGがそれぞれ対応している。以下、この図式におけるそれぞれの対応に関する説明をおこないたい。

◆AとL

AとLは、共に、「挨拶」をテーマとしている。Aは、「ピレモンへの手紙」の端緒であり、Lは、結語である。ここで、Aでは、この手紙の発信者がパウロとテモテであり、受信者は、ピレモン・アピヤ・アルキがさらには「あなたの家にある教会へ」とも書かれており、かかる受信者として教会の不特定多数の人たちも視野に入れていることが推測できる。一方、Lには、発信者としてエパfras・マルコ・アリストアルコ・デマス・ルカを追加しているのだが、受信者は「あなた」としか書かれていない。つまり、Aでは発信者よりも受信者の紹介が強調しているのに対し、Lでは受信者よりも発信者を強調しているといえ、かかる表現法は対照的であるといえる。

断章	発信者	受信者
A	2名	3名+不特定多数
L	5名	1名

◆BとK

BとKは、共に、「心配り」がテーマである。ここで、Bではパウロがピレモンらに対して祈祷をしていることが述べられているのだが、Kでは、逆に、宿舎の準備の依頼と共に、ピレモンらのところに行くことができるように祈祷してほしいという依頼を述べている。つまり、BとKでは、心配りをする側とされる側が逆転しており、こうした点は対照的である。

断章	パウロ	ピレモン
B	心配する側	心配される側
K	心配される側	心配する側

◆CとJ

CとJは、双方とも「力づけ」がテーマである。Cでは、ピレモンにより、パウロや聖徒たちが今まで力づけられてきたことが書かれている。一方、Jには、パウロがピレモンに対し、これから力づけてほしいと要請している。つまり、Cはピレモンによるパウロに対する力づけが過去のものであるか、それとも未来のものであるかという点が対照的である。

断章	力づけ
C	過去
J	未来

◆DとI

DとIは、「オネシモの送還」がテーマである。ここで、Dでは、本来、パウロはピレモンに指示すべき立場であることを述べつつ、オネシモがパウロとピレモンにとって無益な者から有益な者になったことをパウロが主張し、オネシモをピレモンに送り返すことを述べている。一方、Iでは、パウロはピレモンに対して自らを信仰の友として受け入れてほしいことを告げたうえで、オネシモがピレモンに対して不都合なことをした場合、パウロが責任を負うので、オネシモを受け入れてほしいとパウロは述べている。つまり両者はオネシモの送還に関することであるが、Dはパウロの権威に基づいたものであるのに対し、Iではパウロは懇願調である。こうした、パウロのピレモンへの姿勢は対照的であるといえる。

断章	パウロの姿勢
D	権威的
I	懇願調

◆EとH

EとHは、双方とも、「オネシモの価値」がテーマである。ここで、Eにおいてパウロはオネシモがパウロ自身の心ほどの価値があると述べている。一方、Hでは、パウロはオネシモの価値を、ピレ

モンにとってピレモンの身体以上の価値があると述べている。つまり、EとHではパウロは自分と相手、心と身体という対照的なものを取りあげてピレモンの価値を論じている。

断章	人物	部位
E	パウロ	心
H	ピレモン	身体

◆FとG

FとGは、共にオネシモに対する「引留め」がテーマである。Fでは、パウロが投獄されていたとき、パウロはピレモンの代わりにオネシモを引留めたことが書かれている。一方、Gでは、オネシモがピレモンのもとをしばらく離れていた理由が、ピレモンがオネシモを引留める気持ちを誘発させるためであったというパウロの見解が述べられている。ここで、Fでの引留めはパウロによる過去の事実であるのに対し、Gの場合はピレモンによるものであるが、これはあくまでもパウロの見解に過ぎず、仮にかかる引留めが生じたとしても未来におけるものであり、両者は対照的である。

断章	引留める人物	引留め
F	パウロ	過去の事実
G	ピレモン	未来の予測

以上の、AとL、BとK、CとJ、DとI、EとH、FとGの対比を、特徴Aおよび特徴Bと照合してみたい。

まず、テキストにおけるそれぞれの対応は対照的な関係性を持っている。この点は、特徴Aと合致するものである。かつ、テキストの図式の前半要素はA→B→C→D→E→Fと配列しているのに対して、後半要素はG→H→I→J→K→Lという順序である。つまり前半要素と後半要素の配列は逆転しており、この点については特徴Bと合致するものである。以上より、テキストは特徴Aと特徴Bの両方に合致するため裏返し構造である。

6. おわりに

本稿においてテキスト「ピレモンへの手紙」を分析したところ、テキストは裏返し構造により構成されていることがわかった。なお、本稿では、「口語訳」の聖書に収納された「ピレモンへの手

紙」をテキストとしたのであるが、「新共同訳」版や「新改訳」版などによる当該手紙には触れなかった。さらに、例えば英語版などの日本語以外の諸言語に翻訳された版にも触れなかった。かかる翻訳の違いがもたらす影響について、楠本は次のように述べている⁽³⁶⁾。

聖書は神の言葉と信じられているがゆえに、大きな影響力を持つ。しかし原典においては、旧約はおもにヘブライ語で書かれ、新約はギリシア語で記されており、それを理解できる人々は限られる。そこで聖書は各国語に翻訳され、広く読まれるようになった。その訳出の作業自体が聖書解釈を含み、訳によっては原語とは別の意味が伝えられ、あるいは内容そのものが変わってしまう可能性がある。

つまり、翻訳により原語との解釈の差異が生じる可能性がある。また、異なる翻訳版どうしても解釈の差異が生じる可能性がある。このことは、構造を検討するうえでも、翻訳がもたらす影響は看過できないことを示唆しているといえる。筆者としては、「口語訳」版以外の版にも同様に裏返し構造がみとめられるか、について、今後確認しようと思っている。以上を踏まえ、かかる裏返し構造の発現が、聖書テキストの特性に起因するか否かについては引き続き検証するつもりである。

注

- (1)大林太良. 異郷訪問譚の構造. 口承文芸研究. 1979, (2), p.1-9.
- (2)大喜多紀明. アイヌ口承テキストに見られる裏返し構造: 異郷訪問譚によらない事例. 北海道言語文化研究. 2016, (14), p.45-72.
- (3)大喜多紀明. 聖書「創世記」冒頭の5つの物語の構造: 異郷訪問譚によらない裏返し構造の事例. 北海道言語文化研究. 2017, (15), p. 195-216.
- (4)大喜多紀明. 新約聖書「マタイによる福音書」の冒頭に配置された5つの物語の構造: 「対称性仮説」の蓋然性. 北海道言語文化研究. 2018, (16), p. 25-48.
- (5)大喜多 (2018).
- (6)本稿では当該仮説を「対称性仮説」と呼ぶ.
- (7)日本聖書協会. 聖書. 日本聖書協会, 1989.
- (8)本稿では、日本聖書協会 (1989) による呼称を使用する.
- (9)日本聖書協会 (1989).
- (10)大喜多 (2017).
- (11)大喜多 (2018a).
- (12)大喜多紀明. 「ルカによる福音書」全体における裏返し構造. 人間生活文化研究. 2018, (28) 75-81.
- (13)大喜多紀明. ルカによる福音書9章51節～19章46節にみられる裏返し構造: 対称性仮説に関する検証に向けて. 人間生活文化研究, 2018, (28) 610-618.
- (14)大喜多紀明. 新約聖書「ヤコブの手紙」にみとめられる裏返し構造: 「物語」とはいえないテキストの事例. 人間生活文化研究, 2019, (29) 15-21.
- (15)勝俣隆. 異郷訪問譚・来訪譚の研究—上代日本文学編. 和泉書院, 2009, p.1.
- (16)大林 (1979).
- (17)依田千百子. 韓国の異郷訪問譚の構造. 口承文芸研究. 1982, (5), p.47-57.
- (18)大林 (1979).
- (19)本稿ではこれを「特徴 A」と呼ぶ.
- (20)本稿ではこれを「特徴 B」と呼ぶ.
- (21)楠本史郎. 「聖書翻訳史の光と影」下. 北陸学院短期大学紀要. 2008, (40), p.1-15.
- (22)日本聖書協会. 新共同訳 聖書. 日本聖書協会, 1987.
- (23)いのちのことば社. 聖書 新改訳. いのちのことば社, 1970.
- (24)この範囲を「A」と呼ぶ.
- (25)この範囲を「B」と呼ぶ.
- (26)この範囲を「C」と呼ぶ.
- (27)この範囲を「D」と呼ぶ.
- (28)この範囲を「E」と呼ぶ.
- (29)この範囲を「F」と呼ぶ.
- (30)この範囲を「G」と呼ぶ.
- (31)この範囲を「H」と呼ぶ.
- (32)この範囲を「I」と呼ぶ.
- (33)この範囲を「J」と呼ぶ.
- (34)この範囲を「K」と呼ぶ.
- (35)この範囲を「L」と呼ぶ.
- (36)楠本 (2008: 1).

(受付日: 2019年8月15日, 受理日: 2019年9月9日)

大喜多 紀明（おおぎた のりあき）

東京工業大学大学院総合理工学研究科電子化学専攻修士課程修了。
専門は民俗学。

主な論文：アイヌ女性叙事詩「スズメの酒盛り」についての考察：交差対句と心意。アジア民族文化研究。2012, (11), p.181-213.

聖書「創世記」冒頭の5つの物語の構造：異郷訪問譚によらない裏返し構造の事例。北海道言語文化研究。2017, (15), p.195-216.